アメリカと第二次世界大戦
―「歴史」と「記憶」―

ジョージ・ワシントン大学教授　ロナルド・スペクター
（相澤淳　訳）

本日は一九四五年以降のアメリカにおいて、第二次世界大戦がどのように記憶され、解釈され、そして記念されてきたかについて、そのいくつかの例をお話したいと思います。「歴史と記憶」というトピックは、もちろん、大変幅広いものであります[1]。この課題だけで専門の学術誌が少なくともひとつは存在します。私はこうした広範な学問分野で何かしら特定の専門的意見を持つものではありません。しかし、第二次世界大戦におけるアメリカの経験に関して、その歴史と記憶の間の相互作用の特徴と思われる部分について概略説明いたします。

まずはじめに、歴史家にとって「記憶」という言葉について、少なくとも非常に異なった二つの重要な意味があることを心に止めることが重要です。「記憶」という言葉には、まず個々人の記憶という意味があります。こうした記憶は、親戚や友人、そして子孫に口頭で伝えられ、アメリカ人の過去を見る見方に強い影響を与えます。歴史研究者もまた個々人の記憶について、記録文書の補完、或いは不幸にもそれが不明の場合の代替としてこれに興味を持っています。二十年前は比較的新しいアプローチであったオーラル・ヒストリーは、今日、二十世紀アメリカに関するあらゆるの分野の歴史家によって日常的に実践されています。

同時に、個々人の記憶には歴史資料として問題もあります。最も顕著なのは、記憶が不正確であるかもしれないということです。人々は時には物事を忘却し、あるいは混同します。心理学者や記憶についての研究者は、個々人が他人の示唆や伝聞に影響されやすいということも証明しています。彼らはまた、事実全く起こらなかったことの生き生きとした回想という「嘘の記憶」の存在についても証明しています。最後に、我々皆がよく知るように、覚えていることと話したいことにはしばしば違いが生じます。サー・イアン・ハミルトン将軍が述べたように、「戦闘の当日は真実はどこにでも転がっている。次の朝にはそれらに早くも脚色が加わり始まる」のです。

歴史家によって理解される「記憶」という言葉の第二は、政府、利益団体、メディア、芸術、そして大衆文化による歴史の記述、使用という場合です。一例を挙げると、フィリピンのマクタン島にアメリカ支配の

初期に建てられた小さな記念碑には次のように記されていました。

フィルディナンド・マゼラン

この地でフィルディナンド・マゼランは、マクタン島の支配者ラプ・ラプとの戦いで一五一二年四月二十七日に死亡した。その後、マゼラン隊の一隻「ヴィクトリア」は最初の世界一周を達成した。

その記念碑は、一九四五年のフィリピン独立後、新しい次の文章のものに置き換えられました。

ラプ・ラプ

一五一二年四月二十七日、ここにラプ・ラプと彼の部下達はスペインの侵入者を迎え撃った。こうしてラプ・ラプは、ヨーロッパの侵略を撃退した最初のフィリピン人となった。

ところで、両方の意味での「記憶」は、今日のアメリカの第二次世界大戦観を形づくる上で大きな役割を果たすとともに、エノラ・ゲイ論争のような最近の「文化の戦争」を煽ってもいます。

一九四五年以降の最初の二十年間、アメリカ人の戦争の記憶と言えば、肯定的で、これをほめたたえ、自己満悦にさえ浸るいうことが主でした。連合軍最高司令官であったアイゼンハワー将軍が自分の日記に「ヨーロッパの聖戦」という表題を付けたことを、誰も奇妙にも不適切にも思わなかったのです。

第二次大戦は、アメリカがなぜ国際紛争に参加しなければならないのか、そしてこれを如何に戦い終結するのか、の典型として見做されました。この戦争の記憶は、成功には程遠かった朝鮮戦争やベトナム戦争へのアメリカ人の不満を促進しました。朝鮮半島やインドシナ半島で戦った兵士は、自分たちの不運と第二次大戦のアメリカ兵の幸運をしばしば比較します。ベトナム戦争の兵士ティム・オブライアンは彼のベスト・セラー *If I Die in a Combat Zone* (*Box Me Up and Send Me Home*) の中で、彼が所属していた師団の兵士 の様子について次のように記述しています。「彼らはどこかの地点を占拠し、そして確保しようという気持ちを持っていなかった。そこには秩序も勢いもなかった。前線もなく、後方もなく、平行にきちんと並んだ塹壕もなく、ライン河へ猛進するパットンのような指揮官も存在せず、強襲し奪取し、そしてしばらくの間保持するべき橋頭堡もなかった。彼らには目標もなく大義もなかった。時によっては、彼らはベトナムのどこに位置するのか、あるいはその存在意義さえ知らなかった。」(2)

第二次大戦後の最初の二十年間は、また、大衆文化がほぼ同様の肯定的メッセージを伝える傾向にありました。イオー・ジマ記念館のような記念碑や博物館は、アメリカの力と決意と勇気と自己犠牲を象徴するものと見られました。"Twelve O'Clock High" "Sands of Iwo Jima" そして "A Walk in the Sun" のような映画も「戦争は悪いものだが、異なった人種と宗教と社会的背景を持つアメリカ人が、国家を維持しファシズムを

打倒するためにひとつに結集する方法であった」というメッセージのものでした。同時に、元兵士らの回想もより甘美なものになりました。有名な戦争小説家のジェームズ・ジョーンズは「自分の命を守るために緊張したり這えずり回ったりしていない時は、遠くからはそうした行動が冒険的で刺激的なものに見える。その距離が遠退けば遠退くほど、冒険的な感覚も大きくなる」とそれを適切に表現しました。

しかしながら、一九六〇年代の後半に入ると、よりアンチ・ヒーロー的で失望した戦争への見方が持たれ始めます。費用がかさみ、道徳的にも問題があり、そして欲求不満がたまるベトナム戦争の影響から、多くのアメリカ人は世界正義のための戦士・アメリカというそれまでの普遍概念に疑問を持つようになったのです。無辜の市民の犠牲、枯葉剤の使用、秘密爆撃、グリーン・ベレーの殺戮事件等ベトナムでの状況が知れわたるにつれて、アメリカ軍は英雄というより悪玉として扱われるようになりました（たとえば、第二次大戦では第二三歩兵師団の「アメリカ師団」といえば、一九四四年の劇的なフィリピン解放の部隊として連想されましたが、ベトナム戦争ではこの部隊はソンミ村の虐殺を連想させたのです）。一九六〇年代の人種、市民権問題への関心も、第二次大戦中のアメリカ軍内部の人種差別、北部諸都市での人種がらみの暴動、制裁事件、そして日系アメリカ人の強制移住問題等人種差別への大きな関心を促しました。そして遂には、ガー・アルペロヴィッツや一九六〇年代のニュー・レフト史家達は原爆投下を批判的に再検討しましたが、これはアメリカを第二次大戦の他の交戦国並み、或いはそれ以下の悪業国と示唆するようなものでした[3]。

第二次大戦後の次の二十年間、ニュー・レフトとは関係ない他の史家達も、この大戦でのアメリカの作戦や用兵術について批判的に再考察するようになり、戦争の正のイメージを支持しなくなっていきました。ラッセル・H・ウェーリー、ジョン・エリス、カルロ・ドエステ、そしてマーチン・V・クレウォルドによるヨーロッパ戦線での作戦再評価では、アメリカの戦争指導が経験不足と内部抗争に悩まされ、しばしば浪費的で、時には的外れで想像力に欠けるものであったとされました[4]。これらの著者の何人かは、第二次大戦で最も効果的であった戦闘集団は、イギリスやアメリカやロシア軍ではなく、ドイツ軍であったと強く示唆しています。

太平洋戦域でも、それまではアメリカのナポレオンに準えられたダグラス・マッカーサー将軍の再評価が、より綿密さを増すようになりました。まず、D・クレイトン・ジェームズの念入りで包括的な伝記とキャロル・ペティロの刺激的で簡潔な心理学的研究、続いてロナルド・スペクターの *Eagle Against the Sun*、そしてジョン・F・ショートール等による最も徹底した研究がそれらに当たります[5]。

これらの著者達は、マッカーサーの偉大な成功が、主に、或いは完全に彼の有能な部下達、ロバート・アイケルバーガー将軍、ジョージ・C・ケニー将軍、ダニエル・E・バーレイ提督、そしてエニス・C・ホワイトヘッド将軍などに負うものであった、と強調したのです。

海上の戦闘への再評価はより限られたものでしたが、ドイツによるア

メリカ東海岸とメキシコ湾地域での破壊的な潜水艦作戦（ロール・オブ・ドラム作戦）[6]との関連で、アーネスト・J・キング提督の指導力と判断力への批判的な検討が加えられました。

学界ではこのようにニュアンスの異なったより批判的な戦争観が持たれる一方で、一九八〇年代後半から一九九〇年代初頭には、戦争そのものやその兵士達をさらにロマンティックに描く傾向も生まれました。ロナルド・レーガン大統領と彼の演説起草者、そして彼のイデオロギー共有者がこうした動きを引っ張りましたが、多くのアメリカ人が彼らの親達や祖先のより単純で明快なよい点を見ていこうとしたこともその動きを支えました。一九九〇年代初期までにこうして元兵士らは過大評価されるようになりました。『タイム』誌には「第二次大戦世代はもう一度我々を救うか？」との論説も展開され、この記事では、この世代の生き残りこそが、貪欲で自己中心的でわがままなその息子、娘、そして孫達に代わって、献身と勇気と信頼をもってアメリカの抱える問題に立ち向い得るとされたのです。このようにして一九九四年には、「第二次大戦観」のいくつかの異なった潮流が真正面から対立する状況が生まれました。そして、その不幸な戦場となったのがスミソニアン協会でした。

一九九四年、スミソニアン航空宇宙博物館はその展示について、アメリカにおいていままでの中で最も加熱し、政治的争点ともなった論争に巻き込まれました。その年の一月、博物館の航空学部門は、広島に原爆を投下したB29「エノラ・ゲイ」号の復元胴体を呼び物にする展示計画案を完成させました。

この計画案は綿密なもので、展示される物品、写真、文書の種類がその配置と貼付されるラベルと共に示されていました。また、その中にはそれぞれの展示物および展示部門間の関係を説明する長文のテキストも含まれていました。そして、その展示会は「十字路：第二次世界大戦の終結、原子爆弾、そして冷戦の起源」との仮名が付されていました。

この展示については、ほぼ最初から議論の的になりました。『エア・フォース・マガジン』編集者のジョン・T・コーレルはその展示案を、アメリカの戦争指導の残忍さ、復讐性、そして人種差別的動機を描く「政治的に正しい展示」と皮肉を以て攻撃しました。他に元兵士らの団体やメディアも、その展示会が示す解釈について批判を加えました。この展示はバランスを欠くもので、日本人の被害と原爆の恐ろしい効果を強調する一方、戦争における日本の侵略と残虐行為を無視しており、そして原爆の使用が疑わしいか、おそらくは間違った選択であったと印象づけようとしている、と攻撃したのです。政治家やいわゆる文化人、元兵士らのグループは、こうした展示が第二次大戦終結五十周年を記念するものとして元兵士らに捧げられることに憤激の情を露にしました（奇妙なことに、元兵士らが少しでも侮辱されることに最も熱心に抵抗した人々の中には、一九六〇年代に自らが元兵士になることを拒否する（徴兵拒否）理由には事欠かいていなかった人々も含まれていました）。

一九九四年末までに航空宇宙博物館の計画案は、国防省の軍事史家と退役空軍士官のアドバイスの下に、五度見直しされました。元兵士グループやコラムニストは、その変更をまだ受け入れがたいとして拒絶し、

展示への攻撃を継続しました。八一名からなる議員は博物館館長マーチン・ホーイットの辞任を要求し、上院はその決議によってスミソニアン博物館が自由のために命を捧げた兵士らの思いに疑いを差し挟むことを避けるよう警告しました。そして、この時点までに博物館側はアメリカ在郷軍人会による展示計画案の一行毎に繰り返される修正をのむに至っていました。

事態の終息は、一九九五年一月に起こりました。在郷軍人会は、ホーイットがアメリカ軍が日本本土で戦った際の犠牲者見積もり数を変更しようとしているとして、展示会の完全中止と航空宇宙博物館への議会による調査を要求しました。一月三日、スミソニアンの新総裁・E・マイケル・ヘイマンは、展示会の中止を発表しました。

エノラ・ゲイ論争の原因とその意義付けには、もちろんいくつかの違った見解が存在します。あるグループはこの論争をより大きな社会的、政治的、学問的潮流の一現象と見ています。歴史家のジョン・ダワーは、これを「最新の、そしておそらく最も伝染性の高い所謂文化戦争の爆発」[7]と捉え、マイケル・シェリーと共に「移ろいやすく、ノスタルジックで内向き」の愛国主義的正統見解の盛り上がりと説明しています。この正統的見解からは、「原爆の使用や広島の遺産について学問的、或いは道徳的疑義を発すれば、その国民はイデオロギー主義者、或いは裏切り者との非難が加えられるのです。」[8]歴史家もこの正統見解の下では、分析や問題提起ではなく、祝意や称賛が求められたのでした。

マリリン・ブラット・ヤングは、ベトナム戦争との関連から説明しています。彼女によると、ベトナム以降、類い稀なる善良な国アメリカという神話が次々に崩れつつある。その中で第二次大戦は「アメリカの誠実さを自らに示す最後の砦のひとつ」として残るものであり、「アメリカの残虐行為によってその戦争が終結したという可能性を示唆したスミソニアンの展示は、それまで疑いもなく美徳とされてきた戦争全体に疑問を投げかけ、わずかに残された国家神話の拠り所を無くすもの」だったのです[9]。

この加熱した論争と中傷合戦の全体を振り返ると、エノラ・ゲイ論争は、事実上、ある種の全国家的Kultur-Kampf（文化闘争）における重要な戦いだったのであり、こうした状況下では連邦政府の基金による主要博物館が複雑で議論のある歴史的事件について展示をすることは不可能であったろう、と容易に結論付けられます。しかしながら、それまで他の公的機関は議論が巻き起こるような事項についての展示や記念行事には成功を収めてました。例を挙げれば、アリゾナ記念艦やリトルビッグホーン（カスター将軍の部隊の全滅地）、ホロコースト博物館、PBCのベトナムと南北戦争についてのドキュメンタリー等です。他にも航空宇宙博物館自身が太平洋戦争終結の問題と同じく感情的対立による議論の的になり得る第二次大戦時の戦略爆撃についてのシンポジウムを一九九〇、一九九一年に開催した例があります。

では、なぜエノラ・ゲイ展示はうまく行かなかったのでしょうか。コーンとリネンソールも言うように、これは当初から問題の火種をもっていたのです。根本的な問題は、スミソニアンの総裁・ロバート・マコー

ミック・アダムスと博物館長・ホーイットが、第二次大戦に従軍した兵士達の勇気と偉業を讃えながら、同時に原爆の使用とその結果についての再考察についても展示できる、と考えたことにありました。博物館の展示関係者はすぐに気が付きましたが、これは不可能な任務でした。

航空宇宙博物館内の展示諮問委員会（十名の学者で構成され、その内日本もしくは第二次大戦関係の専門家一名、元兵士一名のみ）は、展示関係者にとってほとんど何の助けにもなりませんでした。その委員会は、スタン・ゴールドバーグ、リチャード・ローズ、そしてマーチン・シャーウィン等原爆の製造および使用決定の研究に没頭する人々が中心となっていたのです。

展示会は当然のこととしてこうした学者の、原爆使用の理由と結果を分析し再評価しようという生涯にわたる問題意識（取りつき観念とでもいうもの）の影響を受けました。アルペロヴィッツやJ・サミュエル・ウォーカーと同様、彼らの論点は、原爆の使用はおそらく不必要だったのであり、どの道日本は間もなく降伏したであろうし、アメリカの指導者もそれは知っていた、それゆえ、原爆使用の真意は、ソ連を威嚇するか、或いはこの超兵器の製造に費やした莫大な科学的、財政的努力を正当化することだった、というものでした。

展示会の構想は、こうした学者の問題意識を映しだす鏡でした。展示計画の原案では、展示区画の一つが専ら「原爆投下の決定」に当てられ、その決定をめぐる多くの歴史的論争が前面に押し出されました。この諮問委員会の多くの学者は、原爆の使用を少なくとも現在の視点では道徳的に不快に感じていたので、展示にはこうした見方も同じく反映しました。この展示をめぐる論争に火が付いたとき、他の歴史家や専門家や元兵士らがこの諮問過程に動員されましたが、航空宇宙博物館の救済は手遅れでした。

この問題の第二の不幸は、この展示をめぐる論争が旧来のより広範な論争の上に激化したことです。その論争とはそれまでの航空宇宙博物館の方向性に対する、多くの航空宇宙界や空軍関係者の大きな不信感や苛立ちが原因となっていました。大雑把な言い方をすれば、空軍は博物館側が反戦、反軍、そして明らかに反空軍であると疑っていたのです。他方、博物館側は航空宇宙界が博物館を航空防衛産業の偉業を伝える単なる宣伝機関と見なしていると腹を立てていました。博物館の本質と目的をめぐる専門的で哲学的な対立もあったのです。一九九四年には、こうした猜疑と対立は危機に達していました。空軍協会にとっては、エノラ・ゲイ展示は彼らの多くの大切な思想、価値感に対する最終的で容認できない攻撃だったのであり、それゆえ彼らは爆発したのでした。

スミソニアン協会は、その方針や信頼性、そして研究者個人等に対する猛烈な世論からの攻撃という事態には組織として全くの準備不足でした。その世論対策は中途半端で効果がなかったのです。航空宇宙博物館は、上院や下院、メディアや元兵士の団体に味方を全く欠いており、それをどう探したらよいかさえも分かっていませんでした。強力な元兵士組織の影響力に対して、彼らには諮問委員会のメンバーである太平洋戦争の元兵士一人がいるだけでした。強まりゆく空軍の抵抗や他の軍の不

快感に対しても、彼らは空軍戦史部長・リチャード・ハリオンの推薦書を示すのみでしたが、ハリオンはそうした推薦書を提供したことを強く否定していました。

この世論対策の悲劇の背景には、スミソニアンの自己満足と尊大癖がありました。世論からは畏敬と驚嘆の念、学会からは尊敬と服従の態度のみを受けることに慣らされたこの博物館は、反対者からの挑戦に取り組む準備を欠いていました。「博物館側に防御線をはる機会は確かにあったが、彼らは決してそうしなかった」と空軍協会のメディア対策責任者はリネンソールに話しています。「我々ははじめ彼らは何をするだろうかと考えていました。しかし、しばらくするとそうした心配をやめました。彼らは何ら動こうとしないことが分かったのです。」[10]

博物館側を守って然るべきひとつのグループが歴史家のグループで、彼らの対応は示唆に富むものでした。カイ・バード、バートン・バーンステイン、ガー・アルペロヴィッツ、そしてロバート・J・リフトンは、「広島についての公開討論のための歴史家委員会」を設置しました。その名前は重要で、それは「歴史家に対する政府の弾圧に反対する委員会」でも「議会の検閲に反対する委員会」でもなく、或いは「スミソニアンの独立性を守る委員会」でもなく、原爆についての「公開討論のための委員会」だったのです。彼ら自身はその専門分野について話すことが、学問の自由とか公立の博物館の役割とか責任等について問答することより、学者としてはるかに重要だったのです。そして彼らは確かに数多くの原爆についてのシンポジウムや会議を開催し、そこではまた数多くの報告、意見交換が同じ一定の学者間でなされました。こうした彼らの努力の実際の効果はどうだったかというと、ホーイットがスミソニアン総裁のヘイマンと副総裁のコンスタンス・ニューマンと最後に会談した際「展示会の中止によって、政府の圧力に屈したという汚名を全国の学者がスミソニアンに冠することになる」と警告したのに対し、ヘイマンとニューマンは「議会予算と寄付金の大幅減額という脅威の中で、歴史家達の主張を退けた」のです。「ニューマンとヘイマンによれば、学者達にはスミソニアンを支援するという姿はどこにもなく、彼らの発言も時が立てば消えてなくなるであろう」ということでした[11]。

最終的には、「スミソニアンに愛国心を吹き込もう」と欲した人々も「広島についての公開討論」を擁護した人々も、共に勝者のように感じることができました。保守派もいわゆる「政治的正統性」をめぐっての勝利を収めることができました。原爆歴史家は、彼らの見解が放映され（例えばＡＢＣテレビ・スペシャル）、彼らの著書の販売が促進されるという、かけがいのない公開の機会と広範な場を得たのです。

しかし実際の戦争がそうであるように、この「文化の戦争」の戦いも彼らが思うほど決定的な結果には至っていません。論争中の各集団は、特集欄、学術論文、中傷合戦、メディア、そして原理原則への訴えという武器をもって、航空宇宙博物館から撤収し、他の戦場へと移動展開しました。前線からの報告は、まだこれからも続くのです。

（平成十年六月二十四日戦史部において行われた講演のペーパーを翻訳したものである）

註

(1) 最近のアメリカでの見方については以下を参照。John Bodnar, *Remaking America: Public Commemoration and Patriotism in Twentieth Century America* (Princeton: 1992); Tom Engelhardt, *The End of Victory Culture* (New York: 1995); *Journal of American History* (March 1989), pp.1117-1221.

(2) Tim O'Brien, *If I Die in a Combat Zone (Box Me Up and Send Me Home)* (New York: 1989), pp.69-70.

(3) Gar Alperovitz, *Atomic Diplpmacy: Hiroshima and Potsdam* (New York: 1965); Martin J. Sherwin, *A World Destroyed: The Atomic Bomb and the Grand Alliance* (New York: 1973).

(4) Russell R. Weigley, *Eisenhower's Lieutenants: The Campaign of France and Germany 1944-45* (Bloomington, IN: 1981); John Ellis, *Brute Force: Allied Strategy and Tactics in the Second World War* (New York: 1988); Carlo d'Este, *Bitter History: The Battle for Sicily 1943* (New York: 1988); Martin Van Crewald, *Fighting Power* (New York: 1998).

(5) D. Clayton James, *The Years of MacArthur* Vol. I 1880-1941 (Boston: 1970) Vol. II 1941-1945 (Boston: 1975); Carol Petillo, *Douglas MacArthur: The Philippine Years* (Bloomington, IN: 1981); Ronald Spector, *Eagle Against the Sun: The American War with Japan* (New York: 1985); John F. Shortal, *Forged by Fire: Robert L. Eichelberger and the Pacific War* (Columbia, SC: 1987).

(6) これに関する記述については、例えば以下を参照。Robert W. Love, "The U.S. Navy and Operation Roll of Drums, 1942" in Timothy J. Runyan and Jan M. Copes (eds.), *To Die Gallantly: The Battle of the Atlantic* (Boulder, CO: 1994), pp.96-120.

(7) Edward T. Linenthal and Tom Engelhardt (eds.), *History Wars: The Enola Gay and Other Battles for the American Past* (New York: 1996), p.75.

(8) *Ibid.*, p.71.

(9) *Ibid.*, p.208.

(10) *Ibid.*, p.48.

(11) *Ibid.*, p.165.

◎筆者紹介◎

一九四三年一月、アメリカに生まれる。エール大学から博士号を取得。海兵隊員（歴史チーム）としてベトナム戦争に従軍。米国陸軍戦史センター史家、アラバマ大学教授、米国海軍戦史部長等をへて、現在、ジョージ・ワシントン大学歴史学部長・教授。*Eagle against the Sun: The American War with Japan* (1985), *U.S. Marines in Grenada, 1983* (1987) ほか、太平洋戦争、アメリカ陸・海軍に関する著書、論文多数。